



Title	農業青年の生活と学習活動について：北海道の三地域の比較を通して
Author(s)	門脇, 保身
Citation	北海道大学教育学部社会教育研究室報, 1976, 53-68
Issue Date	1977-03
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/28590
Type	bulletin (article)
File Information	1976_P53-68.pdf



[Instructions for use](#)

農業青年の生活と学習活動について —北海道の三地域の比較を通して—

(卒業論文要旨)

社会教育ゼミ4年 門 脇 保 身

1 課題意識

本論文では、農業「近代化」政策のもとでますます少なくなっている農業青年が地域農業、地域づくりの担い手として成長していくためにはどうしても必要な農業青年の学習・教育活動の発展を援助できるような学習論の構築の手がかりを見い出すことを日ざしており、そのために実態調査を通じて、農業青年の学習・教育活動の方向性を考える場合の基礎となる、農業青年の状態及び意識・行動について明らかにすることを課題とする。

2 調査地の概要

士別市(水田地帯) 稲作経営の北限地であり、生産力も低位不安定であって、一戸あたりの経営面積もそれほど大きくなく、機械化の進行も道央稲作中核地帯に比べ一歩遅れている。

新篠津村(水田地帯) 道央稲作中核地帯にあって典型的な大規模稲作経営地域であり、機械化による「近代化」も急速に進んでいる。

洞爺村(畑作地帯) 農協を中心とする農民の集団的な努力によって農業「近代化」政策におし流されることなく地道に地域農業を発展させている。

3 調査の概要

調査対象者と調査内容

(調査対象者)

- 年齢は16才~25・26才までで、農業に主として従事している青年
- 青年団をはじめとする組織活動に参加している青年

(調査方法)

- 配票調査法と集合調査法とを併用

(調査内容)

- 調査青年の属性と就農の動機について
- 農業青年の家族内における地位・役割について
- 生活時間と余暇利用について
- 今後の農業展望と農村での生活に対する意識について
- 今までにうけてきた農業教育について
- 農業青年の学習要求について
- 組織活動に対する意識について

調査青年の人数・年令と分析視点

(調査青年の人数・年令)

調査青年の人数および年令構成は表1のとおりである。

(分析視点)

○ 営農形態と生産力の発展程度が異なる士別、新篠津、洞爺という三地域の比較検討。

○ 農業労働の経験の長さの異なる年少青年と年長青年との比較検討(今回の調査では、22才以下と23才以上とに分けた。

○ 男子青年と女子青年との比較検討(但し、今回の調査では女子青年のサンプル数があまりにも少ないため、女子青年に関する調査結果は参考程度に位置づけた。)

表1 調査青年の人数と年令

	士別市		新篠津村		洞爺村	
	男	女	男	女	男	女
16~22才	16人	3人	8人	4人	12人	5人
23~26才	13人	0人	5人	0人	1人	0人
年令不明	0人	0人	5人	5人	0人	0人
計	29人	3人	18人	9人	13人	5人

分析にあたっては、サンプル数が少ないことと、農業青年のうちでも若い方のサンプルが多いことを配慮しつつ、大きく変貌しつつある農業・農村のなかで、基本的には農民であるという性格は変わらないにしろ、かつての状態に比べある程度質の高い教育を受け、またマスコミ等の発達により都市との交流が盛んになり価値意識も多様化してきているといわれている現代の農業青年像を浮きぼりにしたい。

なお、本道の農業青年一般を対象に状態から意識まで幅広く調査したものは、最近のものでは昭和46年、49年に北海道農業会議が行なった調査に限られるが、今回の調査では、それらの調査では十分明らかになっていない、あるいはまったく触れていない、家族のなかでの青年の地位・役割や学習要求、組織活動にまでふみこんで調査を行なった。

4 農業青年の実態調査の分析

(1) 調査対象者の属性と就農の動機

今回の調査対象者の大部分が高卒以上の学歴であり、その多くは専門科目として農業を学んでいる。(表2参照)

また経営耕地規模はその地域ではかなり上層に位置している農家の子弟が大部分である。これらの青年は学卒後直ちに就農しており、就農に際しては農業を一つの職業として選択して就農する傾向が強まっており、親の方も農業を継ぐことを強制しなくなってきている。

(表3、4参照)

表2 調査対象者の最終学歴
()は女子青年の人

	士別	洞爺	新篠津
中 学 校	2人	0人	2人
高 校	19 (3)	15 (5)	19 (8)
短大・大学 (在学中含む)	11	3	3

不明女子1人

表3 就農理由

()は女子青年の人数

	士 別	洞 爺	新 篠 津
家が農家で他にあとつぎがないから	5	6	4
やりがいのある仕事だと思っから	5	2	4
農業が好きだから	6(1)	2	3(1)
安定した収入が得られるから	0	0	0
都会の生活がいやだから	1	1(1)	1(1)
親・兄弟がすすめたから	2(1)	1(1)	2(2)
先生がすすめたから	1	0	0
友人・知人が農業をやっているので	1	2(1)	0
そ の 他	3(1)	3(2)	5(2)

表4 親から就農するように強く言われたか。

(男子青年)

(女子青年)

	士 別	洞 爺	新 篠 津	士 別	洞 爺	新 篠 津
強く言われた	3(10%)	2(15%)	0	0	3	5
あまり言われなかった	14(48%)	7(54%)	13(72%)	2	2	2
ほとんど言われなかった	10(34%)	3(23%)	4(22%)	1	0	0
よくわからない	2(7%)	1(8%)	1(6%)	0	0	1

(2) 家族内における青年の地位・役割

農業における機械化の進展にともない、青年が生産労働面ではたす役割はますます重要になってきており、今や中心的な労働力として位置づいているが、経営管理面においては依然親が中心的な役割を担っており、青年の地位は全体として低いといえるが、ただこの面でも直接生産に関わることでは青年の地位はやや高くなっている。(図1、2、3 参照)

図1 地域別・年令別による生産への参加度
自分が主として従事している比率

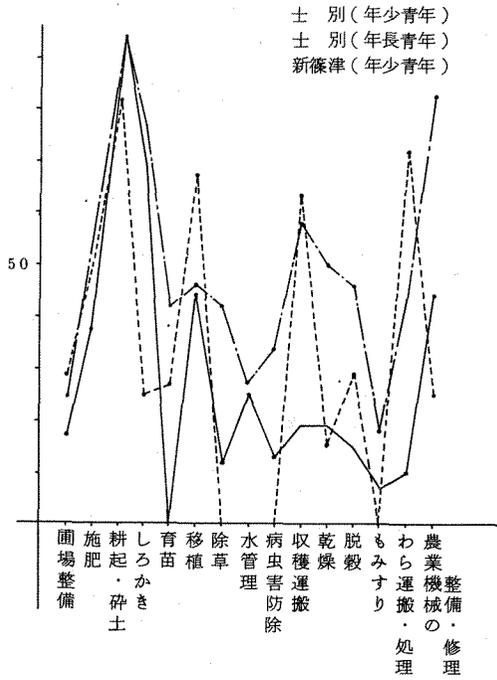


図2 年令別による生産への参加度 洞爺(年少青年)
自分が主として従事している比率

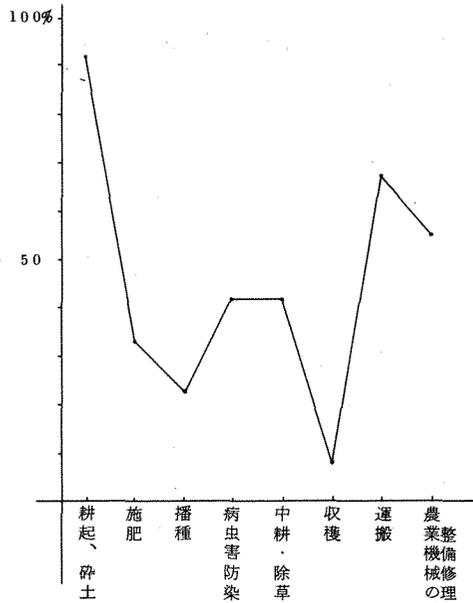
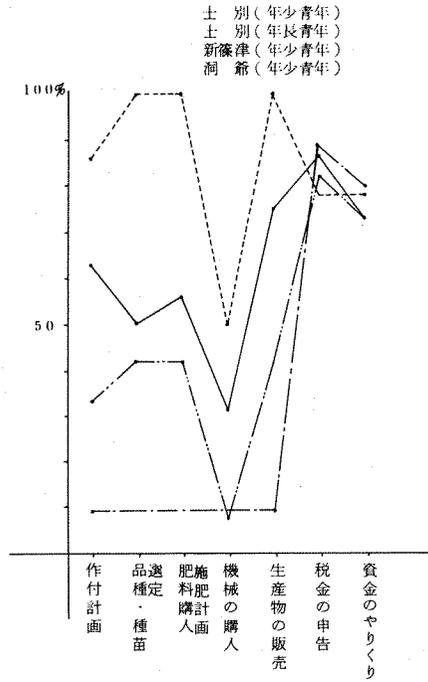
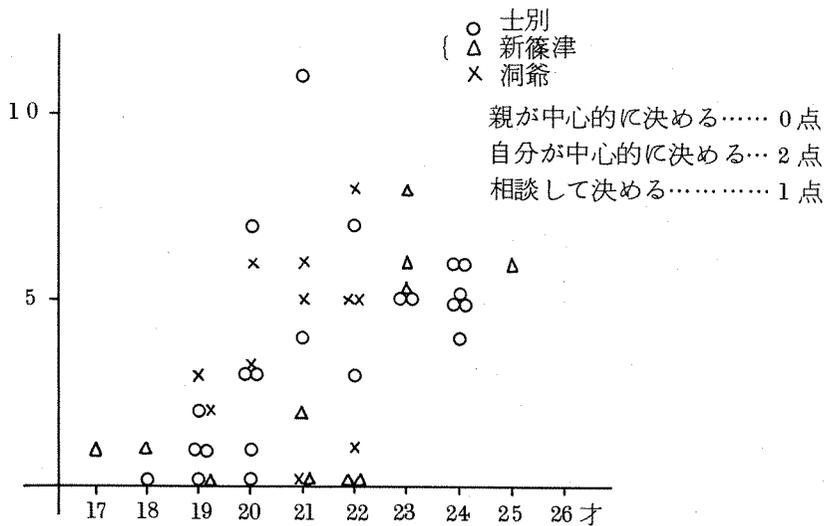


図3 地域別・年齢別による経営への参加度
(親が中心的に決める比率)



また家族内における地位・役割を年齢層別でみてみると、年長青年の方がやや高く、地域別では洞爺の青年が三地域のなかでは最も家族内における地位・役割は高いといえる。(図4参照)

図4 地域別・年齢別の経営への参加度



次に労働に対する報酬についてしてみると、その額は依然低く、得る方法でもまだ日給・月給制は確立していない。(図5、6参照)

表5 [小づかいの額] ()は女子青年の人数

	士別	新篠津	洞爺
1万円未満	1	0	0
1万円台	13(3)	7(2)	7(2)
2万円台	10	6(2)	5(1)
3万円台	3	3	2(1)
4万円以上		1	0
平均(男性のみ)	17,400円	21,400円	17,500円

(表6) 小づかいを得る方法 ()は女子青年の人数

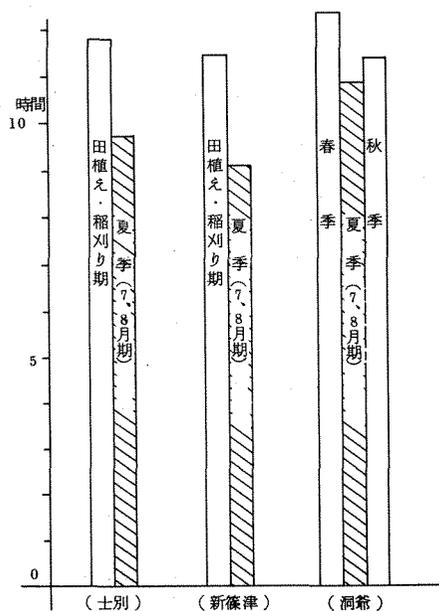
	士別	新篠津	洞爺	全道(49年)
a 定額の日給・月給をもらっている	6(1)	11(3)	4(1)	19%
b 収入の一定割合をもらっている	0	0	0	2%
c 一定部門からの収入を自分のものにしてている	0	1	0	
d 時々小遣いをもらう	13(2)	11(4)	11(3)	52%
e 現金ではほとんどもらわない	0	0	0	5%
f 自分の稼ぎでの収入を小遣いにしてている	12	0	0	
g その他	0	0	1(1)	14%

無記入 6%

(3) 生活時間と余暇利用

青年の1日の農作業時間はかなり長い。とくに畑作地帯である洞爺では農作業時間は一年中長く、青年は自分の自由になる時間をなかなかもてない傾向にあるといえる。(図5参照)

図5 農作業時間 (男子青年)



このような青年にとって1日のうちで一番くつろげる時間である夜間の時間の使い方をみてみると、洞爺では外出、しかも青年団や研究会活動などの青年活動を主目的とする外出が多い。これに対し、士別、新篠津では外出する青年は少なく、とくに士別では青年活動を目的として外出する青年は少ない。(表7参照)

表7 夜間の過ごし方

	士 別		洞 爺		新 篠 津	
	男	女	男	女	男	女
よく外出する	9(33%)	2(82%)	9(82%)	3(60%)	7(50%)	1(13%)
たまに外出する	15(56%)	0	2(18%)	1(20%)	4(29%)	6(75%)
ほとんど家にいる	3(11%)	0	0	1(20%)	3(21%)	1(13%)

次に冬期間の過ごし方および農外就業の状況を見てみると、三地域で様相はかなり異なっていることがわかる。士別では冬期間、農作業期間を問わず農外就業に出かける青年が多く、とくに冬期間は農業学園、農業関係の短大のⅡ部へ通う一部の青年を除くと残りの青年の大部分は何らかの形での農外就業に出かけている。新篠津では農作業期間に農外就業に出かける青年はほとんどいないし、冬期間の農外就業も徐々に減っているそうである。そして冬期間は家でのんびりと過ごす青年も多い。洞爺では農外就業に出かける青年は少なく、冬期間は青年団活動などの組織活動を行なって過ごす青年が多い。次に三地域に共通した特徴として、青年が農外就業に出かける理由や動機は「家でブラブラしていてもしょうがないので」といったように余裕が感じられる理由や動機が多いといえる。(表8、9、10、11、12参照)

表8 冬期間の過ごし方

	士 別		洞 爺		新 篠 津	
	男	女	男	女	男	女
出かせぎなどに出かけるためほとんど家にはいない	5人	0人	1人	1人	3人	0人
だいたい家にいる	11	2	5	2	10	2
そ の 他	*11	0	6	2	3	*6

* 11人中9人は拓大のⅡ部へ

* 6人全員下宿して習いもの

表 9 「だいたい家にいる」と答えた人は具体的にどのようにすごすか。

()は女子青年の人数

	士 別	洞 爺	新 篠 津
家からかよえる賃労働に出る	8人(1人)	2人	0人
農業機械の整備・修理をしたり、その他、家の中の小さなこまごました仕事をいろいろやっ過ごす	3人	0人	0人
読書や勉強をしたり、学級・研修会等に出かけて、教養や農業に関する知識をふやすようにつとめる	2人	1人	5人(1人)
青年団やグループ・団体活動をいっしょうけんめいやる。	4人	2人	4人
友人と遊んだり、スポーツしたり、また町の方へよく遊びに出かける。	0人	0人	6人(1人)
なんとなく家でブラブラ過ごす	0人	0人	3人(1人)
そ の 他	1人(1人)	3人(2人)	0人

表 10 冬期間の出稼ぎの有無

	士 別		洞 爺		新 篠 津	
	男	女	男	女	男	女
あ り	16人(57%)	1人(33%)	6人(46%)	1人(20%)	9人(50%)	0人
な し	12人(43%)	2人(67%)	7人(54%)	4人(80%)	9人(50%)	6人(100%)

表 11 出かせぎに出かけた理由・動機

()は女子青年の人数

	士 別	洞 爺	新 篠 津
冬場、家でブラブラしていてもしょうがないので	8人	0人	3人
自分のこづかいをかせぐために	2人	4人	3人
自分の家の経営を援助するために	2人	0人	0人
しばらくの間、家をはなれてくらしがよかったから	1人(1人)	3人(1人)	0人
そ の 他	1人	0人	2人

表 12 農作業期間の出かせぎの有無

	士 別		洞 爺		新 篠 津	
	男	女	男	女	男	女
あ り	12人(48%)	0人	1人(8%)	1人(25%)	2人(12%)	1人(25%)
な し	13(52%)	2(100%)	11(92%)	3(75%)	15(88%)	3(75%)

(4) 今後の農業展望と農村での生活に対する意識

青年の多くは農業経営、農業技術、農業政策・農業問題、青年団などの組織活動、嫁不足のことで悩んでおり、とくに農業政策・農業問題で悩んでいる青年が水田地帯である士別、新篠津でとくに多いことには注目する必要があると思う。また今回の調査対象者がいわゆる結婚適令期からみるとかなり年令の低い青年が多いにもかかわらず嫁不足で悩んでいる青年が多いことから、農村の嫁不足の問題はかなり深刻であり、若い青年にとってもそのことが悩みのタネになっていることがわかる。(表13参照)

表13 農業青年が現在悩んでいること (男子青年)

	士別(年少青年)		士別(年長青年)		洞爺(年少青年)		新篠津	
1位	農業経営のこと	8	農業経営のこと	4	農業経営のこと	7	農業政策や農業問題のこと	5
2	農業政策や農業問題のこと	7	農業技術のこと	3	異性のこと	5	異性のこと	5
3	グループ・団体活動のこと	6	農業政策や農業問題のこと	3	農業政策や農業問題のこと	4	農業技術のこと	4
4	農業技術のこと	4	グループ・団体活動のこと	3	結婚相手のこと	4	農業経営のこと	4
5	共同化のこと	4	親子関係のあり方のこと	2	グループ・団体活動のこと	3	結婚相手のこと	3
6	過重な労働のこと	3	結婚相手のこと	2	農業相続(あとつぎ)や将来の職業のこと	3	生活改善のこと	3
7	隣り近所のつきあい	3	以下該当者1人の項目が11項目あり		農業技術のこと	3	グループ・団体活動のこと	3
8	結婚相手のこと	3			過重な労働のこと	3	共同化のこと	2
9	以下該当者2人の項目が4項目あり				遊ぶ時間や金のこと	3	遊ぶ時間や金のこと	2
10					友達のこと	3	友達のこと	2

次に青年が生産・生活のことで各機関に対しどのような要望をもっているのかをみている。国や道に対しては、士別、新篠津では「減反政策、米の買入れ制限の問題」の改善要求が非常に強く、次に「生産物の価格・流通問題」つまり米価問題の改善要求が強い。これに対し洞爺では「生産物の価格・流通問題」「農業資材の価格・流通問題」といった流通関係の問題の改善要求が強い。これは畑作物の価格が一般に低く、不安定であることだけでなく、洞爺の青年が研究会活動で流通関係のことを学習していることも反映していると考えられる。(表14参照)

また市や村など自分の住んでいる自治体に対しては、「過疎問題」「医療・福祉問題」「道路・交通問題」「文化・体育施設の問題」など生活に密着した問題の改善を望んでいる。(表15参照)

次に今後の農業の展望についての意識をみている。青年は現在の農政にはかなり批判的であり、このままではわが国の農業の将来は暗いと考えているが、農業を今後も続けていきたいと

表 1 4 国や道に力をいれてもらいたいこと（男子青年）

順位	士 別	洞 爺	新 篠 津
1位	減反政策 米の買入れ制限 24人 (9.2%)	生産物の価格 流通問題 7人 (7.0%)	減反政策 米の買入れ制限 9人 (8.2%)
2	生産物の価格 流通問題 12 (4.6%)	農業資材の価格 流通問題 4 (4.0%)	基盤整備 4 (3.6%)
3	物価問題 9 (3.5%)	資金・負債問題 3 (3.0%)	医療・福祉問題 3 (2.7%)
4	道路・交通問題 8 (3.1%)	農業労働力 2 (2.0%)	物価問題 3 (2.7%)
5	農業資材の価格 流通問題 4 (1.5%)	物価問題 2 (2.0%)	生産物の価格 流通問題 2 (1.8%)
6	税金問題 4 (1.5%)	文化・体育施設の 問題 2 (2.0%)	農業資材の価格 流通問題 2 (1.8%)
7	資金・負債問題 4 (1.5%)	以下、該当者1人 の項目	税金問題 2 (1.8%)

表 1 5 市や村に力をいれてもらいたいこと（男子青年）

順位	士 別	洞 爺	新 篠 津
1位	道路・交通問題 12人 (4.6%)	基盤整備 4人 (4.4%)	文化・体育施設の 問題 8人 (7.3%)
2	医療・福祉問題 12 (4.6%)	後継者問題 4 (4.4%)	過疎問題 3 (2.7%)
3	文化・体育施設の 問題 8 (3.1%)	医療・福祉問題 3 (3.3%)	道路・交通問題 3 (2.7%)
4	過疎問題 7 (2.7%)	教育問題 3 (3.3%)	後継者問題 3 (2.7%)
5	後継者問題 6 (2.3%)	税金問題 3 (3.3%)	医療・福祉問題 2 (1.8%)
6	生産技術・営農指 導の問題 4 (1.5%)	過疎問題 2 (2.2%)	上・下水道の問題 2 (1.8%)
7	共同化 4 (1.5%)	文化・体育施設の 問題 2 (2.2%)	教育問題 2 (1.8%)
8	教育問題 4 (1.5%)	以下、該当者1人 の項目	以下、該当者1人 の項目

いう意欲は非常に強く、今後は規模拡大ないし現在程度の規模で農業を続けていきたいと考えており、経営の型については個別経営を中心とする部分的な共同化を志向している。（表16、17、18、19参照）

表 1 6 現在の農政の基本がそのまま続くとしたら日本農業の将来は？（男子青年）

	士 別 (年少青年)		士 別 (年長青年)		洞 爺 (年少青年)		新 篠 津		女子青年全体	
	実数	比率	実数	比率	実数	比率	実数	比率	実数	比率
日本農業の将来 は明るいと思う	2人	13%	4人	33%	0人	%	0人	%	2人	17%
日本農業の将来 は暗いと思う	10	63	6	50	8	67	9	56	3	25
どちらともいえ ない	4	25	2	17	4	33	7	44	7	58

表 17 今後も農業を続けたいか

	士 別 (年少青年)		士 別 (年長青年)		洞 爺 (年少青年)		新 篠 津		女子青年全体	
	実数	比率	実数	比率	実数	比率	実数	比率	実数	比率
続けたい	15人	94%	12人	100%	10人	83%	14人	88%	3人	30%
やめたい	0	0	0	0	0	0	0	0	2	20
わからない	1	6	0	0	2	17	2	13	5	50

表 18 具体的にどのような型がいいか (男子青年のみ)

	士 別	*洞 爺	*新篠津	49学全道
経営を拡大して農業をやる	11人 (42%)	6 (50%)	7人 (64%)	60%
経営は現在程度だが農業専業でやる	11 (42%)	6 (50%)	3 (27%)	21
農業中心でやるが、少しは兼業収入も得るようにする	1 (4%)	0	1 (9%)	15
今は兼業中心だが、これからは農業中心でやりたい	1 (4%)	0	0	1
今は農業中心だが、これからは兼業中心でやりたい	1 (4%)	0	0	1
今もこれからも兼業中心で	0	0	0	1
そ の 他	1 (4%)			

※50年調査結果より

表 19 これからの農業をどのような型にしたいか (男子青年のみ)

	士 別	*洞 爺	*新篠津	49年全道
あくまで個人経営でやりたい	6人 (29%)	1人 (8%)	3人 (25%)	30%
個別経営中心でやるが、請負耕作、請負作業などをひきうけたい	1 (5%)	2 (17%)	0	4
個別経営中心でやるが、機械利用などは共同でやりたい	10 (48%)	7 (58%)	4 (33%)	46
特定の作業や部門は委託するが、共同経営したい	0	2 (17%)	3 (25%)	12
共同経営でやりたい	3 (14%)	0	2 (17%)	7
商社との提携で経営したい		0	0	1
そ の 他	1 (5%)	0	0	

※50年調査結果より

次に農村での生活についての意識をみてみる。青年は現在の生活に対してかなり強い改善要求をもっており、具体的には「若い者の言うことを聞いてほしい」など家族内における平等な関係を求める要求が強いといえる。(表 20、21 参照)

表 20 生活の改善点の有無

	男		女		49年全道	
	士別	洞爺	士別	洞爺	男	女
あ	18人(78%)	10人(83%)	2人(67%)	4人(100%)	64%	81%
な	5人(22%)	2人(17%)	1人(33%)	0	36%	19%

また青年は農村に若い人がだんだん少なくなってきたこともあって、一緒に話したり、活動したりする機会を強く求めており、とくに洞爺でこの傾向が強いといえる。(図 6 参照)

また都会に魅力を感じるかどうか質問してみると、「魅力を感じたことがある」と答えた青年の割合は洞爺がずば抜けて高く、具体的には「文化・娯楽の施設があること」「一定額の収入のあるサラリーマンはよいと思う」をあげている。(表 22 23 参照)

(5) 農業青年の学習要求
生産面での学習要求をみてみると、青年は「栽培法」など農業技術関係や、「農業簿記のつけ方」など農業経

表 21 具体的な改善点

()は女子青年の人数

順位	士別	洞爺
1位	若い者の言うことを聞いてほしい	6人() 自由になる金がほしい
2	自由になる金がほしい	6 若い者の言うことを聞いてほしい
3	隣近所の口がうるさい	5 隣近所の口がうるさい
4	もっと栄養を考えた食事をつくってほしい	4 もっと栄養を考えた食事をつくってほしい
5	家の経済状態がわかるようにしてほしい	4 自分の個室がほしい

図 6 若い人が少なくなっている困っている率
(a 非常に困っている + b 多少困っている)

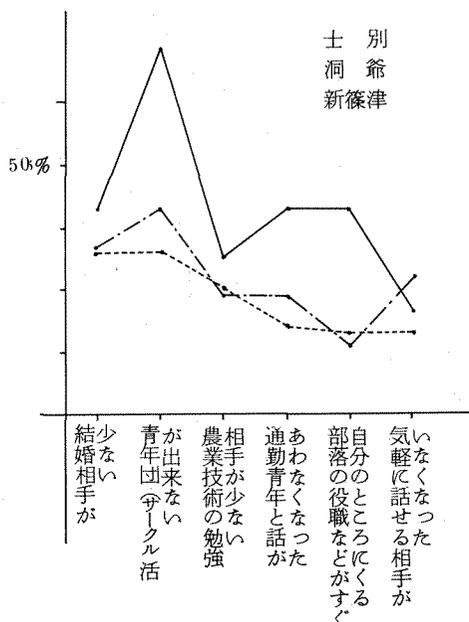


表 22 都会生活への魅力 (洞爺以外は男子青年のみ)

	士 別	洞爺(男)	洞爺(女)	新篠津	*** 全道(47年)
a 感じたことがある	8人(31%)	67%	82%	30%	54%
b 感じたことがない	18人(69%)	33%	18%	70%	46%

*** 15~25才まで

表 23 (a感じたことがある)と答えた理由

	士 別	洞爺(男)	洞爺(女)	47年	全道
				15~25才	26~35才
文化・娯楽の施設があること	2人(25%)	29%	25%	49%	26%
一定額の収入のあるサラリーマンがよいと思う	2人(25%)	43%	13%	8%	23%
都会は自由でいいと思う	1人(13%)	14%	0%	6%	1%
子どもの教育や自分の教育を考えると都会がいい	0人(0%)	14%	13%	22%	37%
都会は医療や社会福祉施設が充実しているから	2人(25%)	0%	0%		
その他	1人(13%)	0%	50%	15%	12%

営関係に対する学習要求は高いのであるが、農業経営を成り立たせる条件である流通関係や制度・政策関係に対する学習要求は低い。しかし、だからといって青年が流通関係や制度・政策への関心がうすいかというわけではなく、前述したように、「悩み」や「要望」の箇所では流通問題や政策問題は前面に出てきており、年少青年でもそれらのことに対する関心が高いことは明らかになっている。しかしそのことが学習要求という形で出てこない理由は今回の調査では明らかにすることができなかったため、このことは今後の課題としたい。(図7参照) また地域別に学習要求をみると、洞爺は農業技術関係のなかでも「栽培法」など「作物の育成に直接関わる面」や「農産物の販売、市場価格のしくみ」といったことの要求が高い。とくに「農産物の販売、市場価格のしくみ」といった流通関係に対する要求が高いのは、「要望」のところで述べたことによると考えられる。これに対し別は「作物の育成に直接関わる面」の要求も高いが、それ以上に「農業機械の整備・修理・使い方」といったことの要求が高い。(図7参照) また年齢層別ではほとんど何もいえないが、ただ経営管理面により深く参加している青年層の方が農業経営関係ないし流通関係に対する学習要求は高い。(図8参照) 次に生活面の学習要求をみる。青年は「技能資格取得」「人生論」「グループ・団体活動の運営について」「スポーツ・レクリエーション」に対する要求が高く、政治・経済・社会の分野への学習要求は低く、わずかに「社会・経済全体の動き」に対する学習要求が目立つ程度である。(図9参照)

図7 農業青年の学習要求(生産面) (男子青年)

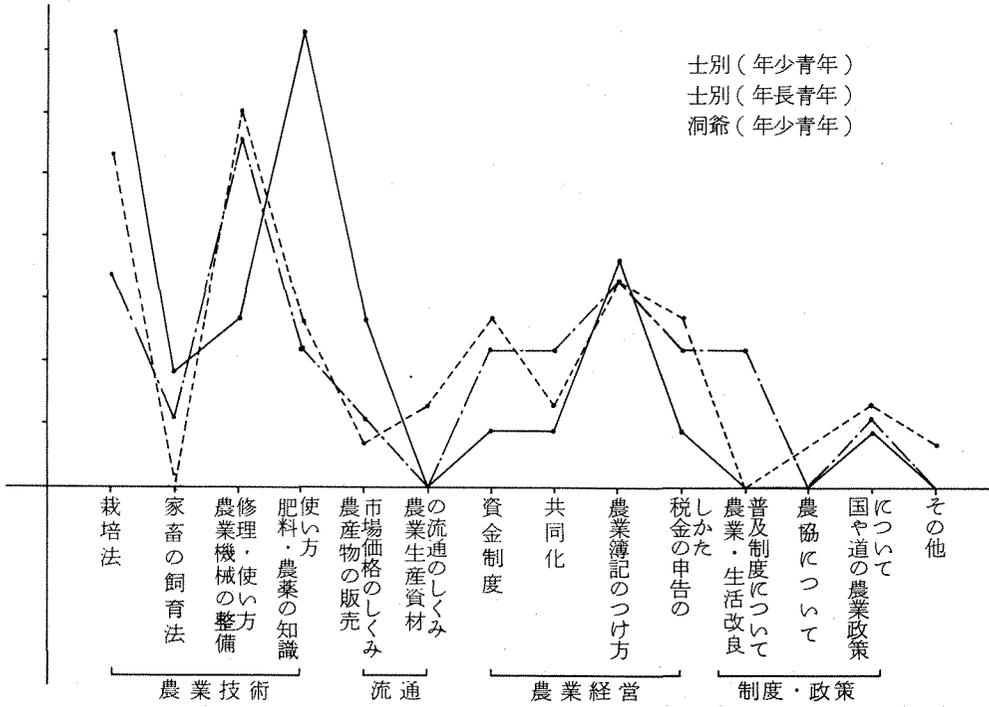


図8 経営参加度別学習要求(生産面) (男子青年)

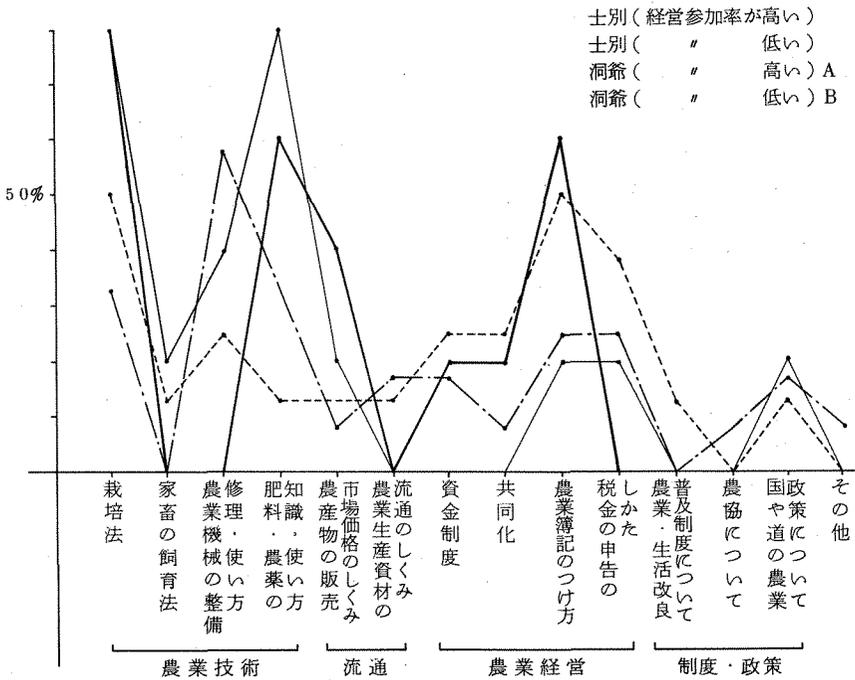
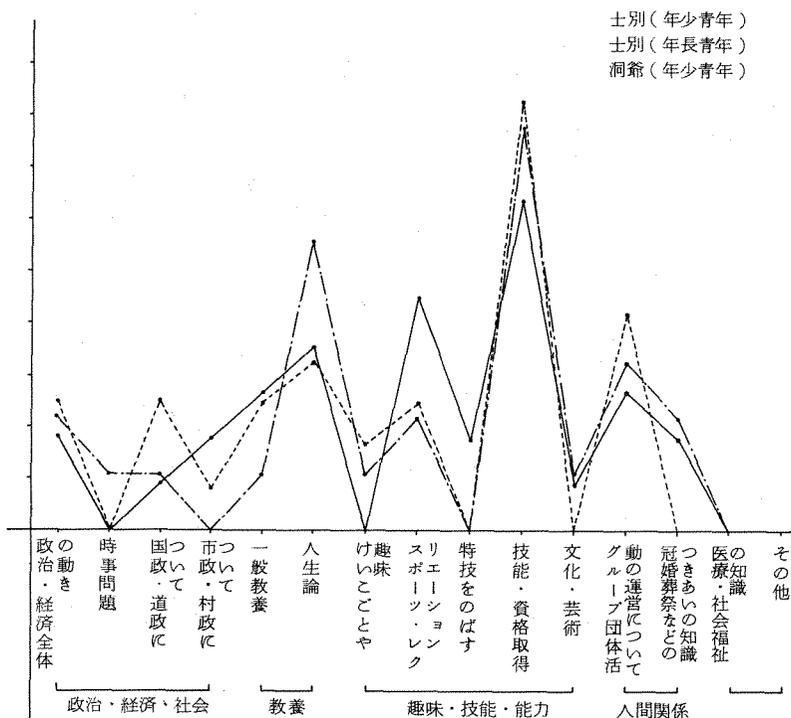


図 9 農業青年の学習要求（生活面）（男子青年）



次に学習しようとする場合の困難点についてみる。学習しようとする場合に困難なことがあると答えている割合はかなり高く、具体的には、時間がとれないという問題、学習活動を組織できないという問題、専門の講師や先生がないという問題があるといえる。（表 24、25 参照）

表 24 学習しようとする場合の困難点の有無（男子青年）

	士別（年少）	士別（年長）	洞爺（年少）	新篠津
あり	8人（57%）	7人（58%）	9人（75%）	6人（46%）
なし	6人（43%）	5人（42%）	3人（25%）	7人（54%）

表 25 具体的な困難点（男子青年）

順位	士別	人数	洞爺	人数	新篠津	人数
1位	学習する時間がとれない	6人	学習する時間がとれない	4人	学習を一緒にする仲間がない	6人
2	自分1人では、どうもする気にならない	6人	1人ではどうもする気にならない	4人	リーダーがない	4人
3	金がない	3人	一緒にする仲間がない 専門の講師・先生がない	3人 3人	専門の講師や先生がない	3人

(6) 青年団などの組織活動

地域青年団をはじめとする青年の地域に根ざした組織活動の展開は三地域で形態・内容においてかなり異なっている。士別では農業青年の数は大巾に減っそきており、しかもその青年の多くは組織活動へは未加入であって個別経営の枠のなかにとじこもりがちになっている。そして青年団や4Hクラブなどの組織もこのような青年を組織できないでいるし、青年団員のなかにははっきりやめたいといっている青年も多い。新篠津では農業青年はかなり残っており、青年団が農業青年の大部分を組織する唯一の組織として幅広い活動を展開しているが、青年団員のなかで今後も青年団をつづけていきたいとはっきり思っている青年の数は少ない。洞爺では農業青年はかなり残っており、組織としては、農業青年の大部分を組織している青年団が仲間づくりと部落との結びつきを主目的として活動しており、他に生産学習を主目的とする「高原野菜研究会」などの研究会活動が展開されており、青年もそれらの研究会へ中心的メンバーとして参加している。このように洞爺では組織活動は大きく二つに分化し、それぞれが活動を活発に展開している。そして青年団員の多くは今後も青年団を続けていきたいと考えている。

5 まとめと今後の課題

これまで述べてきたことを三地域の比較という点でまとめてみると、洞爺の青年が新篠津や士別の青年に比べ、家族内における地位・役割は高く、自覚も高く、学習意欲も強く、学習活動も旺盛に展開しているといえる。このように洞爺の青年が自覚が高く、地位・役割も高いのは、洞爺では農協を中心とする関係諸機関の指導・協力、また生産学習を主目的としている各種研究会活動を基礎に地域農業が着実に発展してきている過程で青年層や婦人層も含めての農民陶冶の実践が進んできていることによるといえる。(なお、洞爺農業の実態については三上論文—1976年度研究室報所収—を参照のこと)とりわけ青年層に関しては、青年団活動や「高原野菜研究会」などの研究会活動の中心的メンバーとして積極的に参加するなかで陶冶され、地域農業、地域づくりの担い手として着実に成長してきている。このことから地域における組織活動のあり方が農業青年の主体形成に大きな影響を与えるといえるわけであるが、この点からいえば、洞爺の青年の組織活動は一つの典型としてとらえることができると思う。

なお、第1に洞爺の青年の組織活動の内実を農業構造との関連でもっと構造的に把握すること、第2に農業青年のうちでも年令の高い方の青年や女子青年の状態、意識についても明らかにし、相互の関連も明らかにすることは今後の課題としたい。